

スタジオの片隅で

お局さまの ひとりごと



NHKアナウンサー

広瀬久美子

講談社

スタジオの片隅で

お局さまの



講談社

スタジオの片隅で^{かたすみ}
お局さまのひとりごと^{つぼね}

©KUMIKO HIROSE 1997 Printed in Japan

第1刷発行 1997年11月13日

著者 ^{ひろせくみこ} 広瀬久美子

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社 〒112-01 東京都文京区音羽2-12-21

電話 出版部 03-5395-3506/販売部 03-5395-3622/製作部 03-5395-3615

印刷所 大日本印刷株式会社 製本所 黒柳製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

落丁本、乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第三出版部宛にお願いいたします。
本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き禁じられています。

¥1400

ISBN4-06-208884-3（文3）

N.D.C 913 292p 20cm

目次

プロローグ——世の中もスタジオも

びっくり仰天玉手箱——4

1. 勇気を出して自分らしく

——飾らないことの難しさ——15

2. 熟女が歩けば危機一髪

——日本の将来はおばさんにかかっている——81

3. 女の仕事は命がけ

——高い壁を乗り越えるための条件——147

4. のどもと過ぎても熱さを忘れず

——生と死、男と女。

とり返しのつかないことだからこそ——219

エピローグ——あとがきにかえて——

装幀・日下潤一
デザイン・刺繡・星合千重子

スタジオの片隅で

お局さまのひとりごと

ブローグ——世の中もスタジオも びつくら仰天玉箱——

スタジオと自宅の往復がほとんどの場合、それも東京のみの三十数年。『箱入り娘』を通り越して、今は立派な『箱入りばあさん』と化してしまった。

長いようで短いこの期間、せまいスタジオの中だけの世界では、それこそ「葦の髄」から天井覗く」ようなことではなかったかと思う。

子育ても、家事も、遊びも、仕事も、息急ぎ切って追われるよう毎日だったが、そんな中での仕事は、あらゆるジャンルの方々と出会い、話を伺い、想像もしない世界に触れることが出来た。言ってみれば『葦の髄』のなかに、全世界を集めたようなものだ。幸せなスタジオ生活だったのかもしれない。

しかし悩みも深い。試行錯誤と、いつも生じる齟齬の連続。特に、人と人のお付き合いの多いこの仕事にはつきものだ。どうすれば相手の一番いいところを出せるのか？

どうすれば相手の気持ちを察することが出来るのか？ 今でも明確な答えを持たないが、番組の中で学ぶこともまた多い。

テレビ『週刊ボランティア』を担当していたときのこと、白鳥で有名な新潟県のひょうとこ瓢湖に、“白鳥おじさん”を取材した。

おじさんには息子もいる。二人ともボランティアで白鳥の世話をしているのだが、父親の方はかなりの達人。“手乗り”とまではいかないまでも、白鳥を自分の子供以上になつかせていた。しかし、息子の方はなかなかうまく出来ない。

どうすればいいかと思ひあぐねて父親にそのコツを聞いたところ、父親はこう言った。

「人と話す時間があつたら、なぜ白鳥に話しかけないのか。白鳥と話しをしろ。白鳥の身になって話してみろ」

この話を聞いてうなつてしまった。うゝゝん。「相手の身になる」というのは人付き合いの肝腎な基本だ。しかし“白鳥”となると、一体どうすればいいのやら。今までに白鳥になったこともないし、“あなた、白鳥みたいに綺麗ね”と言われた——事もないし。皆目見当がつかない。息子さんもさぞ戸惑われたことと思うが、その後どうしておられるやら。

人と話すことが多いとはいえ、誰もが人間の言葉を話すとは限らないのだ。ときに白

鳥語であったり、猫語であったり、犬語であったり、はたまた偉そうな不愉快語であったりと、理解するのがなかなか難しいこともある。何とか仕事の上ではこなしているつもりであったが、先だって大変な目にあった。

別に悪いものも食べていないのに、胃が急に痛くなり、我慢が出来ず病院に駆け込むことになったが立てない。大変。胃痙攣かしら？ 明日はラジオのナマ本番がある。万が一にそなえてピンチヒッターも手配してもらわなければならない。私は電話の子機を握り締め、虫の息でアナウンス室に電話を掛けた。柴田デスクと満尾デスクがいたく心配してくれ、救急車を手配するといってくれたが、救急車はどこへつれていかれるかわからない。

実際「たらい回しされた」という話はゴマンと聞いている。私の知り合いも急病で救急車に乗ったところ、なかなか受け入れてもらえない。やっとOKになった病院があったので、急遽かけつけたのだが、何と、救急入り口は鍵がかかっていて開かないのだ！ 仕方がないと、二軒目へと走ったが、すげなく断られた。やっと三軒目でOK。危ないところだった。病が治って新聞のコラムにこの一件を投書した。それを見て二軒目の病院が丁寧な詫び状を寄越したという。知り合いは怒っていた。

「それなら私が行ったときに何で入れてくれなかったのよ！ 手紙なんかもらっても何の役にも立たないわっ！」

確かに。私もそうなたら大変だ。とりあえず超有名病院に勤める、知り合いのお医者さまに渡りをつけた。優しい、静かな、それでいて、結構冗談がお好き。私の大好きな産婦人科の先生である。先生は青息吐息の私の声を聞いてすぐに言って下さった。

「救急車でもタクシーでもいいからすぐいらっしゃい」

まさに天使の囁き。再度アナウンス室に電話を入れ、二人のデスクから、

「救急車にしろ」「いや、タクシーがいい」

と司令をうけ、マンシヨンの管理室に電話をした。管理人さんは夫婦二人。特に私をはじめ、マンシヨンの住人たちが「おかあさん」と呼んでいる奥さんのほうは、胆が座っていて面倒見がよく、旦那さんをしっかり立てている。その「おかあさん」に頼んで車を拾ってもらい、病院までついてきてもらうべくお願いをした。

今思えば病人とは思えない行動だったが、家には誰もいない。娘も夫もお勤めだ。いるのは愛する猫が二匹。うつ伏せに寝て苦しむ私の背中に飛び乗って歩いていったが、手は貸してくれない。

タクシーの運転手さんも急いでくれて、かなり遠い大病院に無事到着。しかし、それからがえらいことだった。

救急の受け付けが、まず冷たい。いろいろ用紙に書けというし、健康保険は勿論、診察券はないかとせまるのだ。保険証はいつも持ち歩いているが、えゝゝっ！ 診察券？

そんなもの持つてくる余裕があったら苦労しないわ。

「ありません」といったら、「 अच्छで待つていて下さい」と冷たく言われてしまった。

ベンチで待つこと十数分。なかなか呼ばれない。管理人さんはしびれをきらし、

「病気によっては手遅れになる！」

と怒りつつ、受け付けに掛け合ってくれたが、しばらくしてやって来た受け付けの男性は、再度言った。

「診察券はありませんか？」

うゝゝん。どうしてでしょう!!

いくつかあるベンチに数人が腰掛けていたが、別に急病人でもなさそうだし、診察室も混んでいる気配もない。ゆつたりと看護婦さんがあちこち歩いている。せめてどうなっているのかぐらい、教えてくれれば気が落ち着くのに――。こんな時の待時間は地獄のように長い。こんな具合では、亡くなる人もいるのではないかと心底恐ろしかった。

やっと呼ばれてベッドに横たわったとき、痛さと怒りで涙が溢れ、私は看護婦さんに抗議した。

「何でもっと早く呼んでくれないんですか！ 病人の気持ちにもなってください！」

「ええ。私たちはいつも患者さんの気持ちになって働いています」

「そんなら何でこんなに待たすんですか。一度病気になってごらん下さい！」

叫ぶ私に彼女は落ち着いて言った。

「夜ですから」

またまた私は激怒してしまった。

「昼間来られればいうことはありませんよっ！」

夜だからこそ、不安で心配なのではないか。全く。患者の気持ちになつてなどとよくも言えたものだ。追ひ詰められていた私は冷静さを欠き、怒りまくつたがふと気が付いた。

「あらっ。まずいわ。これから世話になる人にこんな態度をしては、殺されないまでもちゃんと処置をしてもらえないかもしれない」

看護婦さんだつて、日頃の激務に深夜勤務。おまけに人手が足りなくて職業としては、名高い3K（汚い、きつい、危険）だ。病状の落ち着いた今になると、彼女たちの気持ちや立場は十分に理解できるのだが……。

やっと産婦人科の先生に連絡がつき、先生はとても心配して専門の胃腸科の先生に連絡をとつて下さった。点滴を受け、車椅子でレントゲンと超音波を撮りに行くが、信じられないほどフラフラして立ち上がれない。おまけにひどい頭痛に襲われた。あまりの頭痛に本来の胃痛が目立たなくなったほどだ。いったいどうしたのだろう。この世の終わりかしら？

ようやく病室に入れてもらえたが、ゴーゴーという大音響とともに、どえらく寒い冷房の風が吹いている。冷房がきついと余計胃が痛むではないか。私はラジオのゲストにいらした、作家の山口洋子さんの話を思い出した。

山口さんが病を得て入院された時、あまりの冷房のきつさに腹が立ち、

「あれは、病院の先生方のために入れてるんじゃないの？ 病人に寒さはこたえるのよ」

と、当時を思い出されたのか、険しい表情で話して下さったのだ。私はベッドに横たわりながら、ううん、なるほど。まったくその通りだなあ」と納得してしまった。

車椅子を押してくれた婦長さんに訳を話すと、

「そうですね。温度を上げるように言ってみます」

といいながら、枕元のナースコール（具合が悪くなった時、看護婦さんに連絡するためのスイッチ）を、私が押しやすい位置に置いていってくれた。

しばらく休んでいた。少し暖かくなったようではあるが、それでもしんと冷えてくる。足はもう氷のよう。せめて布団でももらおうと、何度も何度もナースコールを押したが、とうとう誰も来てくれなかった。皆寝てしまったのかしら。

寒さと、騒音。それだけでも落ち着かないのに、誰も来てくれないとなると俄然、心細さが増してくる。六人部屋にはもう一人病人がいたが、これでは、万一私が死んでも

誰にも気がついてもらえない。ひえ〜っ。どうしよう。

専門家からみれば、私の病気は大したことはなかったのかもしれない。しかし、本人にしてみれば、大変だったのだ。アナウンス室のデスクだって、私が一度も休んだことのない土曜日のラジオに、ピンチヒッターを立ててくれたのだから。

大病院とは、こういうところか。その実情に驚くより、啞然としてしまった。こんなことでは命がいくつあったって足りやしない。

やっと、深夜に胃腸科の先生が見えた。

「ここは、騒々しいから、家に帰ってゆっくり休んだほうがいいのではないか」

ということ、夜中の一時すぎに退院した。いや〜、びっくり。

見舞い兼、迎えにきた夫が言った。

「いやあ、すげえ病院だなあ。受付で場所を聞いたたら『適当に探して下さい』っていらんだよなあ。一つ一つカーテンめくって探したんだけど、みんな向こうむいて寝てるからわからないんだ。一人お前にそっくりなのがいたけど、よく見たら違ったんだ。声かけないでよかったよ。もう一人は付き添いの人がお前の姉貴そっくりなんでねえ、でもこんな時間にいるはずがないと思ってじっと見たらやっぱり違ってた。やっとここを見付けたよ」

いや〜、またまたびっくり。どうなっているのだろう。

病の時は誰でも気が弱くなり、普段とは神経の働き具合が違ってくる。そこを病院で考えてくれないと、お互いを理解するのは不可能だ。それこそ、人間語と、白鳥語くらいの差がでてしまい、治る病氣も治らなくなってしまう。

退院後お世話になった鍼灸の安西先生も、漢方薬の根本先生も、治療のあと、
「必ず治りますよ」

と、言ってくれた。その言葉がどれだけ励みになったことか。その一言でもう、回復したような気分になったことだった。

結局、私の胃痛は胃痙攣ではなく、過度のストレスと過労から、胃腸の蠕動運動ぜんどううんどうがぶつくり止まってしまうため、ということが胃カメラの結果判明した。前の晩食べたお粥がそのまま残っていたのだ。「心筋」ならぬ「胃腸筋梗塞」？ 薬も何もきかない。

胃カメラは以前経験して、死んでも飲むまいと思っていたのだが、今回は信じられないほど楽だった。世田谷の個人病院でしただが、喉に三回ほど麻酔を噴霧されたあとは全く覚えていない。看護婦さんに起こされるまでぐっすり眠り、痛くも痒くもなかった。今、かなりこういった処置を取る病院が増えていくという。

しかし、その後、三度はかり発作がおき、吐いたり下したりと生きた心地がしなかった。唯一素晴らしかったことは、二週間で四キロも体重が減ったことだ。お粥とうどん

ですごしたためだが、今までダイエットに励んでも、こうは減らなかった。今後の目標はあと一キロ。いや、四キロ。と、欲をかいていたら友人から、「病気で痩せたんだから氣をつけないさ」

と言われてしまった。ごもつとも。

ところで、急病の場合は決してタクシーで行ってはいけなないと、経験者から聞いた。「タクシーで来られるくらいなら」と、病院での扱いが不親切になるという。何で？

お金を使って冷たくされて、具合が悪くなって、では、遠慮がちな患者は救われない。十数年前いくつかの病院で「乳癌」と誤診され、文句をいったが、あの頃から病院は変わっていない、というより、もっと悪くなっているのではないか？

世の中もスタジオもいろいろびっくりすることが多い。今までの殆どをスタジオですごしてきた身として、少しでもその内側、「輩の中」を紹介することが出来ればと思う。

同時に、一度しかない人生を、こころ豊かにすごすためのよすがになればとも念じつつ。

しかし、大奥局のひとりごと、楽しんで頂ければ何より嬉しく思います。

